

文化間対話における仏教

マリエッタ・ステパニヤンツ

橋本信一 訳

日露仏教シンポジウム開催のご提案を川田所長より手紙にていただき、そのご提案を大いに歓迎いたしました。私ども哲学研究所は常々、外国の学者との交流を歓迎しておりますが、このたびの企画に対しては、それ以外の理由からも喜ばしく思っております。

喜ばしく思う「理由」は、少なくとも二つあります。

一つは、私どもが、ロシア連邦大統領より二度目の最先端学術機関に選出されたことに関係しています。

一度目の受賞は「知識と信仰——さまざまな文化からの考察」というプロジェクトで二〇〇六―二〇〇七年

度にいただきましたが、大成功に終わった受賞プロジェクトが本にまとめられ、本日、日本からお集まりいただきました皆様にお渡しすることができすことは、私どもの喜びであります。そして、二度目の受賞は二〇〇八―二〇〇九年度、「世界の諸文化の中の仏教」というテーマでロシア連邦大統領賞に選ばれました。このたび、皆様方とまさにこのテーマでシンポジウムを開催させていただくということは、我々のプロジェクトの最高のスタートとなります。

もう一つの理由も、非常に重要なものです。先日、

ユネスコの松浦晃一郎事務局長と私もロシア科学アカデミー哲学研究所が「文化間対話における哲学」というユネスコ・チェアを設置することが決定したことです。以前は「東洋哲学と政治思想」というチェアでしたが、今回は国際的により高いステータスを得ることができました。ちなみに、今回のユネスコ・チェアはロシア初であり、哲学のチェアとしてはロシアで唯一の存在です。

ユネスコ・チェアの新しい名前とステータスは、私どもを奮起させています。さまざまな課題を乗り越えるためには、我々の指導方法を抜本的に見直す必要があります。次の質問の答えを探すことから始めるべきかも知れません。すなわち、そもそも文化間対話はどのような意義があるのか、そして、それを進めていくためにはどういう方法が一番効率的なのか、と。それを学び始めるためには、仏教が初めて出会う文明にどのようなに溶け込んでいったかなど、異なる文化同士がどう対話をしたか等を参考にすることが賢明だと思います。

「言葉」と「振る舞い」だけで世界宗教に

仏教は、暴力や軍事力を一切使わずに地球上に思想を広め、世界宗教となった唯一の例です。広める方法は二つだけでした——言葉（仏の教え）と行動（仏教者の振る舞い）です。仏教においては、新しい文化や文明と出会った時の交流の仕方が非常に優れています。

具体的に、どういう点が優れているでしょうか。

第一には、暴力を一切用いないことです。アヒムサー（非暴力）は行動・言動・思考において、生きとし生けるものに対する暴力を律する考えとして、よく知られています。アヒムサーは全てのインド思想の基本・出発点とも言えるでしょう。他の五つの徳とともに『チャンドギヤ・ウパニシャッド』（Ⅲ・17・4）で初めて文献上に登場しますが、それ以来、バラモン思想に対抗するために一番大事な徳として、中心的な役割を担うことになりました。神に命を捧げることはアヒムサーに反することだと主張し、沙門時代（バラモン以外の出家の思想家「沙門（シュラマナ）」が輩出した時代）に、ヴェー

ダの儀式に反対した者がいました。

仏教においてもアヒムサーが重視され、八正道の一つでもあります。仏教者は、アヒムサーの起源を存在論的にみると、人間が他の生き物に対して兄弟であることだとしています（馬鳴『仏所行讀』V・4・13）。そして推理によって、黄金のルールともいえる発想に到達します。すなわち、人間が自分を大切だと思ふのと同じく、他の生き物も自身が大切であろうと考える発想です。結論としては、人間は他の人間や生き物を傷つけることは一切避けるべきだということです。『ダンマパダ』では、「すべての者は暴力におびえ、すべての者は死をおそれる。己が身をひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ」（中村元訳『ブッダの真理のことは』129頁）とあります。世界に存在する憎しみは、憎しみによってではなく、愛でしか消すことができないという訴えが、仏の教への偉大さです。

第二に、仏教者は他と違って、自身が一番優れた者だと主張しないことです。釈尊は説きました。「歩みを行なえ、衆人の利益のために、衆人の安楽のために、

世人に対する同情のために、神々と人間との利益安楽のために」（中村元『ゴータマ・ブッダー』）。そして「譬えばガンジス河、ヤムナー河、アチラヴァティー河、サラブー河、マヒー河、なるこれらの大河は、大海に到ったならば、以前の名と姓とを捨てて、ただ（大海）とのみ呼ばれるように……バラモン、クシャトリア、ヴァイシヤ、シュードラは、如来の説きたもうた法と律とにおいて出家したならば、以前の名と姓とを捨てて、ただ『道の人・釈子』とのみ称する」（中村元『原始仏教の生活倫理』）と。

歴史上、仏教は他の宗教に対して、常に尊敬を示してきました。どの国に根づこうとする際も（中国、朝鮮、タイ王国、ビルマ、日本など）、仏教はその国に存在していた宗教に対して寛容的でありました。同時に、新しい世界観を紹介しようとし、生あるものに対する人々の慈悲の心を引き出そうとしました。各国の文化や伝統の妨げにならないよう努めてきました。なぜなら、どの神を拝んでも、その人自身が優しい人間であれば、それでよしとしてきたからです。従って、各国

の仏教はそれぞれの歴史があり、それぞれの特徴があります。

第三に、仏教は教えを強制しようとしなかった点で、他の宗教と異なります。仏は、「自らを鳥とし、自らをたよりとして、他のものをたよりとせず、法を鳥とし、法をよりどころとして、他のものをよりどころとするな」(中村元『ゴータマ・ブッタⅡ』)と説きました。

そして、仏は自分が神の使いだとは言いませんでした。舍利弗との会話の中で、自分の立場を明らかにしています。

舍利弗「尊い方よ。わたくしは尊師に対してこのように信じています……尊師よりもさらにすぐれた、さとりに関してさらに熟知せる人は、尊師のほかには、過去にも……未来にも……現在にも存在しないであろう」

仏「サーリプッタよ。(過去の仏の全てを)……お前は知っていたのか?」

舍利弗「そうではありません」

仏「サーリプッタよ。……(わたしのことを)心に

関して……お前は知っているのか?」

舍利弗「そうではありません」

仏「では、サーリプッタよ。過去・未来・現在の真人・正しくさとった人々についての(他人の)心のありさまを知る智(他心通)がお前には存在しない。それでは、サーリプッタよ……お前が、堂々としていて、雄大であるこのことばを発し、確かにはつきりと理解して獅子吼をしたのは、何故であるか?」(中村元訳『ブッタ最後の旅』から要約)

またある時、仏が落葉を手に取り、弟子のアーナンダにこの他に落葉はあるかと聞きました。アーナンダは答えました。数えきれないほど落葉が周りに落ちていきます。それに対して、仏は更に答えました。今まで弟子に与えてきた真実はほんの一部(手に取った落葉の数)に過ぎず、全ての真実は数えきれないほど(周りにある落葉の数)あると。

「開かれた柔軟性・包括性」

最後に、仏教が文化間対話を促せた理由として、仏

教の開かれた柔軟性・包括性が特徴的であると思いません。

仏の教えは初めて説法したところから急速に広がり、アシヨーカー王の時代にはマウリア朝に認可された宗教になっていました。紀元前二世紀にはスリランカの人々の生活に根づき繁栄していました。そして、その三世紀後、多民族を抱えるさまざまな王朝にとつて最も取り入れやすい宗教として広まり、仏教は大きい影響力をもつようになりました。一・二世紀のカニシカ王時代にはインドの北部より、中央アジアまで仏教の影響が広がりました。そして、二世紀から九世紀までに、仏教は東南アジア、中国まで広がり、日本、朝鮮、チベット等の国では、国の宗教にまでのぼりつめました。

何故、仏教は数多くの異なる地域信仰、カルトや伝統を同化させることができたのでしょうか。それは、仏教は一つの形に統一されたことが無かったし、一番普遍的な宗教だということを主張してこなかったからかも知れません。「多くの人々に教えを説き示すために」

二人してひとつの道を行くことなかれ」(中村元『ゴータマ・ブッダー』)という仏の言葉もあります。

ダルマは常に、聞いている人の精神的な可能性を見はからつて説かれていきます。仏は人間を蓮の華にたとえました。ある池では、青蓮華が咲き、他の池では赤蓮華があり、また違う池には白蓮華が咲いています。そして、一つの池の中でも、さまざまな段階で開花している華があります。まだ蕾のままの華や、五分咲きや満開の華もあるのです。仏は話す時、人々のさまざまな精神性の機根を重んじました(「善巧方便」の手法)。

仏は、「その人が分かるように教えていないということ」は、その人に教えたとはいえないであろう」と言いました。「善巧方便」によれば、仏の教えそのものが、真実というよりも「真実を得る方法」を教えていて、それがどの教えよりも偉大だということです。仏の教えには、いかだの話があります。荒れた川を渡るためにいかだを使い、いざ向こう岸に着いたら、もはやいかだは無用だという話です。

以上のように、仏教の特徴を幾つか挙げさせていた

でしたが、これはすべての人が仏教徒になるようにという呼びかけではありません。私の目的は、もつとひかえ目なものです。異なる文化や宗教をもつ人々が対話を通して交流のきっかけを作っていく上で、仏教が優れていることを紹介したかっただけです。私の切実な願いは、その偉大な体験からより多くの人が学ぶ機会を増やすことなのです。

(M・ステパニヤンツ／ロシア科学アカデミー哲学研究所
東洋哲学センター・センター長)

(訳・はしもと しんいち／創価大学講師)